

(財)八尾市文化財調査研究会報告107

# 久宝寺遺跡

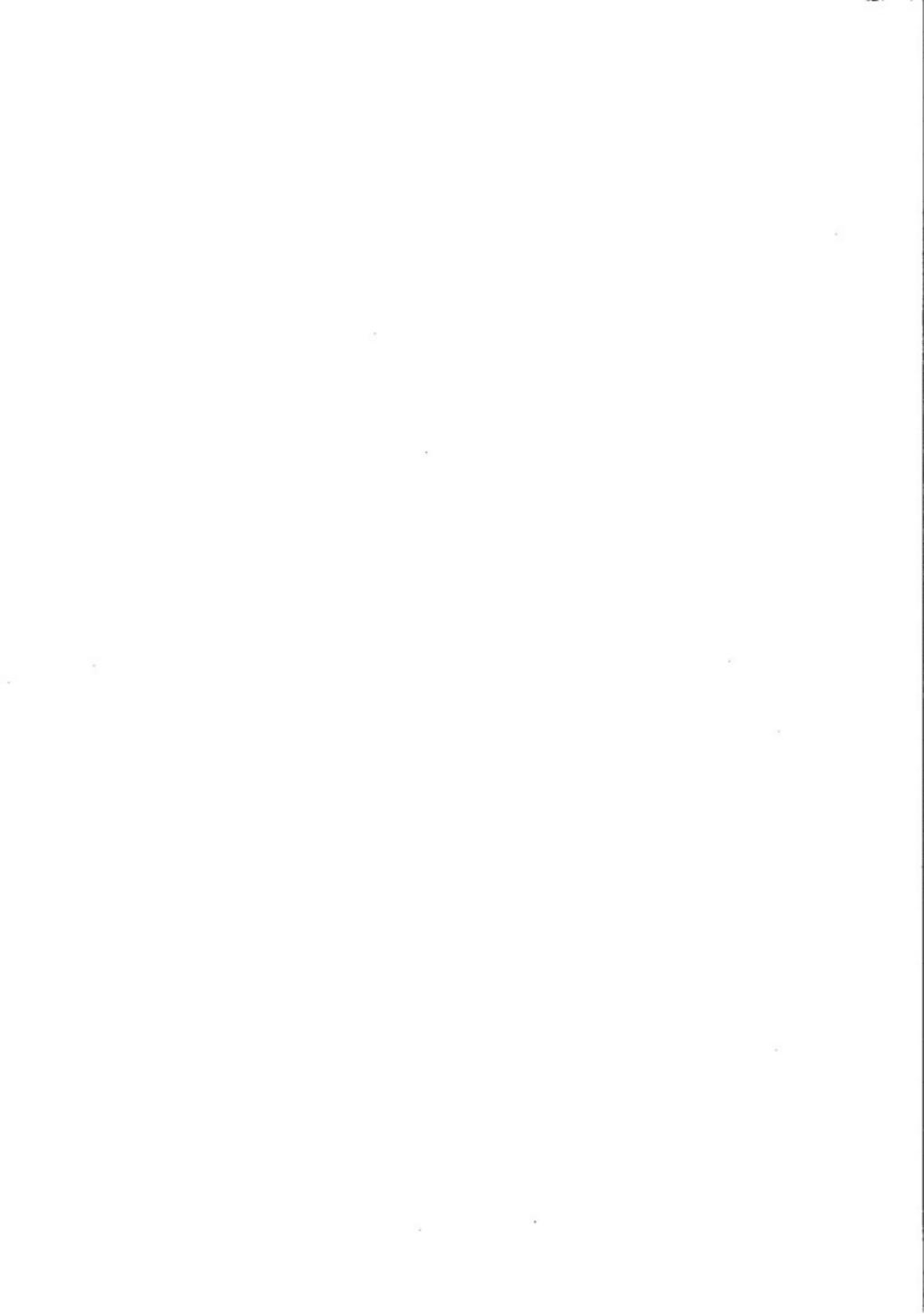
第71次調査

大阪府工業用水道改良事業配水管布設工事Φ400(八尾中央線分岐)

に伴う埋蔵文化財発掘調査

2007年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



(財)八尾市文化財調査研究会報告107

# 久宝寺遺跡

第71次調査

大阪府工業用水道改良事業配水管布設工事Φ400(八尾中央線分岐)

に伴う埋蔵文化財発掘調査

2007年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

大阪府の東部を画する八尾市は、東に綠豊かな自然を残す生駒山地西麓部と、その西側に広がる河内平野の中心部に位置します。このような地形環境を有する本市の歴史は古く、市域の南端に所在する八尾南遺跡では、旧石器時代に遡る遺物の出土が知られています。一方、市域の大部分を占める平野部では、今から2300年前の弥生時代前期から、水田経営を基盤とした集団の生活の痕跡が散見され始めます。以後各時代を生きた先人たちは、度重なる洪水の危険に怯えながらも、それに起ち向かい、この肥沃な土壤を手放すことはありませんでした。近世に至るまで、連綿と集団生活の痕跡が残されているのはそのためです。近年は、今回報告する久宝寺遺跡に包括される旧国鉄竜華操車場跡地において大規模な都市開発が進行しているほか、市民の保健・衛生の向上を図る為、公共下水道の普及にも力を注ぎ、自然と都市型空間との共存を図りながら、今尚発展をし続けています。

この度、平成18年度に実施した久宝寺遺跡第71次発掘調査の整理が完了しましたので、これをまとめ報告書として刊行します。この調査は、諸事情から夜間に実施したものであります。古墳時代初頭～前期の濃密な遺物包含層を確認したほか、古代の建物を構成した柱穴などを検出しました。

このように地中には、私たち現代人が思いもよらぬ自然環境・歴史環境が埋もれています。しかしながら今も市域のどこかで、市民生活の利便性を図るために開発が行われ、それと一緒に、先人が残してくれたかけがえのない文化財が破壊されることもこれまた事実です。

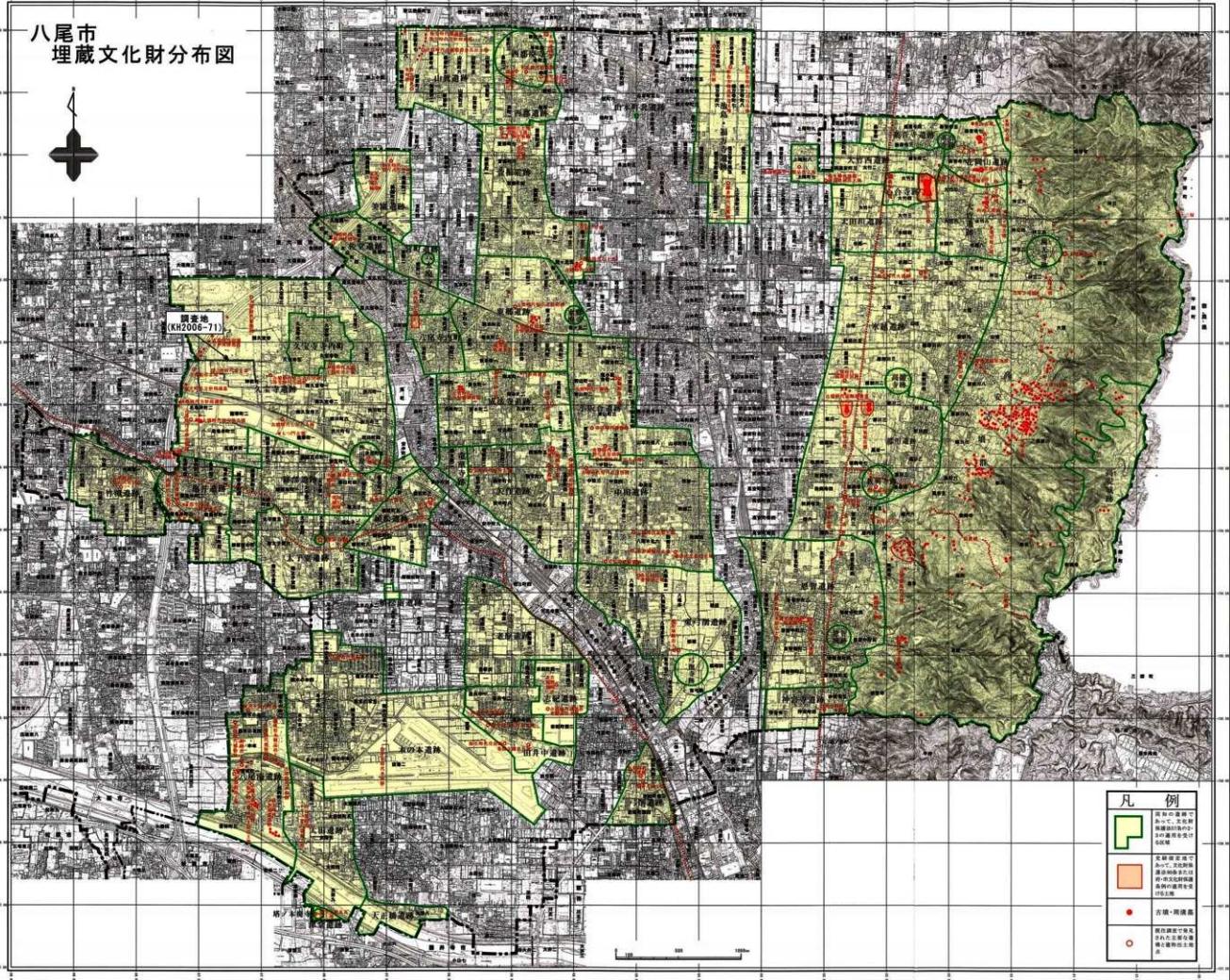
文化財は一度破壊されると、二度と元には戻りません。今後とも埋蔵文化財の保護、および否応なく破壊されていく埋蔵文化財に対して、発掘調査を行い、歴史を記録・保存し、未来に伝承していくという、私たち（財）八尾市文化財調査研究会の活動により一層のご理解・ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対してご協力いただきました関係諸機関の皆様に感謝するとともに、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚くお礼申し上げます。

平成19年5月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 岩崎健二

# 八尾市 埋蔵文化財分布図



## 序

1. 本書は、大阪府八尾市神武町他で実施した大阪府工業用水道改良事業配水管布設工事Φ400（八尾中央線分岐）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第71次（KH2006-71）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪府水道部東部水道事業所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成18年10月25日～平成19年2月28日にかけて、樋口 薫と荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は約120m<sup>2</sup>である。
1. 次の各位には、現地において、遺構や遺物、地層の解釈をはじめ、貴重なご意見を頂戴した。記して感謝の意を表します。  
一瀬和夫（京都橘女子大学 ※当時は大阪府教育委員会）、小川裕見子・関 真一（大阪府教育委員会）（敬称略）
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成19年3月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－岩沢玲子・辻美由紀・永井律子・中村百合・藤中貴子・村井俊子、図面トレース－市森千恵子、デジタルトレース－青山 洋・樋口、写真撮影－青山、写真編集－青山・垣内洋平・樋口、本書の執筆及び編集－樋口が担当した。
1. 調査では、写真・カラースライド・実測図を多数残した。各方面で幅広く活用されることを希望する。

## 凡　例

1. 本書で用いた地図は、大阪府八尾市発行の2500分の1地形図（平成8年7月発行）、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成18年度版）を使用した。
1. 本書で用いた方位は国土座標第VI系（旧座標）の座標北を示す。
1. 本書で用いた標高はすべてT.P.値（東京湾標準潮位）である。
1. 遺構の一部については下記の略号で示した。  
**土坑**－SK　**溝**－SD　**柱穴**－SP
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。  
古式土師器・土師器・瓦器・瓦質土器・土製品・石製品—白　須恵器—黒
1. 土色・遺物の色調は、『新版標準土色帖1998年版』農林水産省農林水産技術会議事務局、財團法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
1. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は、すべて一致する。

## 目 次

第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査の方法と経過	3
第3章 調査成果	4
第1節 基本層序	4
第2節 検出遺構と出土遺物	12
第4章 まとめ	16

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図	2
第2図 基本層序断面図	4
第3図 1~30区位置図	5・6
第4図 25~42区位置図	7
第5図 2~29区断面図	9・10
第6図 30~42区断面図	11
第7図 S P 2内出土石製品	12
第8図 1区第1層内検出遺構平面図	13
第9図 1区第1層除去検出遺構平面図	13
第10図 14区第5層内検出遺構平・断面図	13
第11図 S K 2内出土遺物	14
第12図 第2層内出土遺物	14
第13図 1区第5層内出土遺物	15
第14図 13区第5層内出土遺物	16

## 図版目次

- 図版一 2～29区周辺状況（東から） 30～42区調査地周辺状況（北から）  
1区SK1（東から） 1区北壁（一部SK1の断面を含む：南東から）  
1区SP2・柱抜き取り穴検出状況（北西から） 1区SP2・柱抜き取り穴完掘状況（北西から）  
14区SK2（西から） 13区西壁地層断面（東から）
- 図版二 1区出土遺物 SP2 第5層

# 第1章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する柏原市役所付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に囲まれた低地である。この平野は、旧大和川の主流（恩智川・玉串川・楠根川・長瀬川・平野川）と分流がもたらす冲積作用により、自然堤防や後背湿地などのヒトの営みには必要不可欠な自然地形を形成しながら、その姿を幾度か変えつつ現在に至る。この平野の東部を画する八尾市は、東側を奈良県、西側を大阪市、北側を東大阪市にそれぞれ隣接し、また南側は、柏原市や、1704年以降その流れを西へと転じた現大和川を境界として、松原市、藤井寺市に接している。

今回報告する久宝寺遺跡は、本市の北西部、現在の行政区画では、北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・北龜井・龍華町・渋川町の東西約1.8km・南北約1.7kmがその範囲である。地形的には、旧大和川の主流である長瀬川の左岸、平野川の右岸に形成された冲積地上に立地する。現地表面高を見ると、遺跡南東端がもっとも高く標高9.7m前後、北西端がもっとも低く標高6.0m前後を測り、比高差は約3.7mである。したがって、概ね南東から北西方向に傾斜する地勢を有している。

## 第2節 歴史的環境

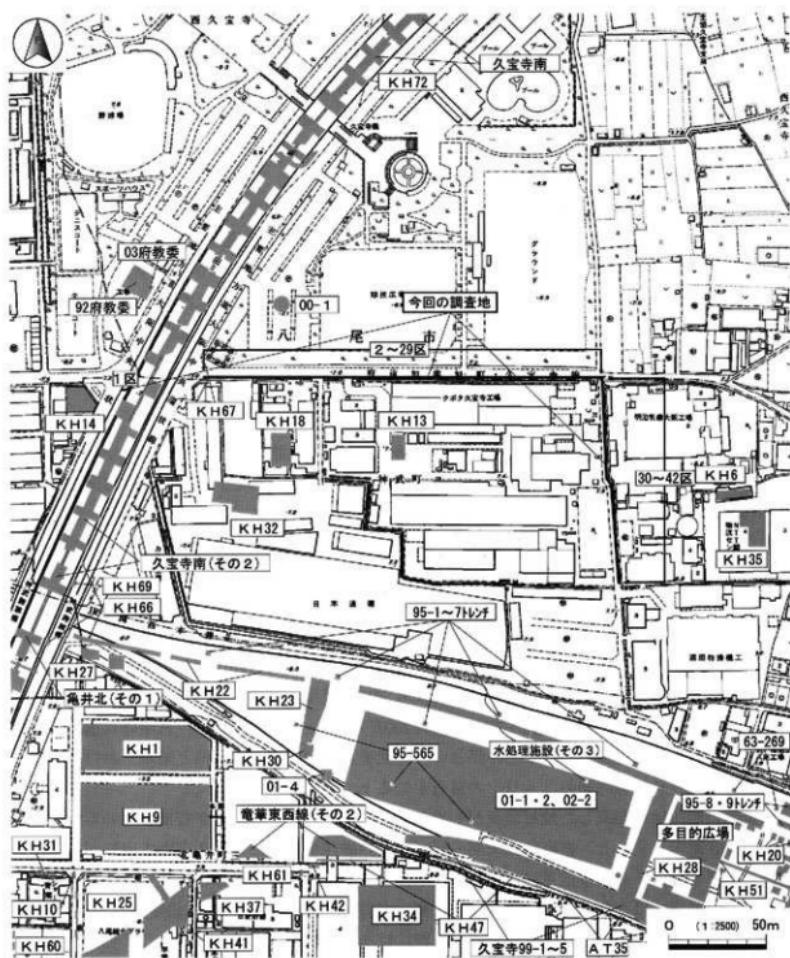
久宝寺遺跡は、昭和10年に久宝寺5丁目で実施された道路工事中に、弥生土器や土師器・須恵器、そして丸木舟の残片が出土したことによりその存在が確認された。その後、昭和55～61年には、（財）大阪文化財センター（現、財團法人大阪府文化財センター 以下府センター）による近畿自動車道建設に伴う発掘調査が実施されたほか、近年では、旧国鉄竜華操車場跡地内において、府センター、八尾市教育委員会（以下市教委）、財團法人八尾市文化財調査研究会（以下当研究会）による調査がそれぞれ行われており、その結果、縄文時代晩期～近世の複合遺跡として周知されるようになった。

この内、府センターによる大阪竜華都市拠点地区整理事業（都市機能更新事業）に伴う多目的広場建設に先立つ発掘調査（西村・南條2003）や、寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設に伴う発掘調査（森屋・亀井・奥村2007）では、弥生時代後期～古墳時代前期の居住関連遺構群、墓域関連遺構群、水田や畑といった生産関連遺構群が、整然と地域をわけて展開する様子が解明され、当該期の「ムラ」の構造を知る上で貴重な情報を得た。

本遺跡の周辺は、類似した地形環境が形成されており、数多くの遺跡が密集している。当遺跡範囲内の北東側を見ると、室町時代末期～江戸時代の居住域を検出した久宝寺守内町があり、当遺跡と跡部遺跡にまたがる位置には奈良時代の遺構を検出した渋川廃寺が存在する。また、長瀬川を挟んだ対岸には、北東側に佐堂遺跡、東側に宮町遺跡・八尾寺内町・成法寺遺跡が展開する。南東から南西には、跡部遺跡や亀井遺跡が、西には加美遺跡（大阪市）が隣接している。

今回報告する第71次調査地は当遺跡内の北西部に位置する。この内1区は、近畿自動車道直下に所在する。近接する地点では、府センターによる久宝寺南（その2）調査が実施され、弥生時

代中期の方形周溝墓をはじめ、弥生時代後期～古墳時代初頭の周溝墓のほか、準構造船の出土を見た。また飛鳥～平安時代にかけての掘立柱建物群を検出するなど、大きな成果を上げている（赤木・一瀬他1987）。その他、西方では当研究会による第14次調査（坪田1993）、東方では第32次調査（森本2000）も行われ、古墳時代前期の居住域に伴う遺構・遺物が多量に検出された。



### 第1図 調査地周辺図

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成18年8月14日、当研究会は、市教委より示された大阪府工業用水道改良事業配水管布設工事Φ400（八尾中央線分岐）に伴う発掘調査依頼を受理した。申請者は大阪府水道部東部水道事業者、申請地は八尾市神武町他である。

申請地は、久宝寺遺跡の北西部に位置する。久宝寺遺跡は、先述したように縄文時代晚期以降の複合遺跡である。特に弥生時代後期～古墳時代前期の居住域、墓域に伴う構造・遺物を多く検出し、西に接する加美遺跡とともに、広く周知されてきた遺跡である。このような調査成果を踏まえた上で、平成18年9月13日、当研究会は、市教委および大阪府水道部東部水道事業者との3者による、大阪府工業用水道改良事業配水管布設工事Φ400（八尾中央線分岐）に伴う久宝寺遺跡発掘調査の業務協定を締結した。調査は、市教委の指導のもと、当研究会が調査を実施する運びとなった。

### 第2節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、当研究会が久宝寺遺跡で実施する第71次調査にあたる。調査地は、久宝寺遺跡の北西部に位置する。調査区は42ヶ所（西から1～29区、その後南へ30～42区を設定）である。1区は近畿自動車道北行きの直下、府道大阪中央環状線神武町交差点内に位置する。平面形状は幅1m、長さ9.0mで、途中鈍角に折れるL字状を呈する。2～29区は、東西に伸びる府道大阪港八尾線の西行き車線上に分布する。平面形状は、2～15区が1×3m、16～29区が1×2mのそれぞれ東西に長い長方形を有する。府道大阪港八尾線から南に伸びる市道久宝寺第9線では30～42区を設定した。それぞれ1×2mの南北に長い長方形を呈する。

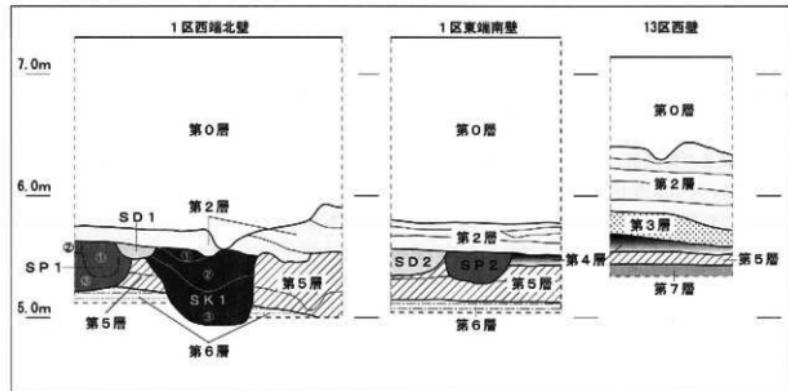
調査は、工事掘削深度に基づき、現地表（1区：7.3m前後 2～29区：7.0～7.2m前後 30～42区：7.2～7.7m前後）下1.6～2.5m前後（1区：2.5m前後、2～42区：1.6m前後）までを調査した。また13・14区では、遺構および遺物包含層の広がりを確認するために、調査区の拡張（13区は西に1m、東に2m、14区は西に1m、東に1m拡張）を行った。調査総面積は120m<sup>2</sup>に及ぶ。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値（府道大阪港八尾線および市道久宝寺第9線上の標高値：T.P.+7.0～7.7m）を使用した。なお、調査はすべて夜間に実施した。調査期間は、平成18年10月25日～平成19年5月31日である。

調査の結果、調査地全域において、中世以降の生産関連遺構（水田・鳥畑・溝）を確認したほか、1区では古代の土坑や柱穴、古墳時代初頭の遺物包含層を検出した。また、13区では古墳時代前期の遺物包含層を確認するなどの成果を得た。出土遺物はコンテナ（縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m）3箱を数える。

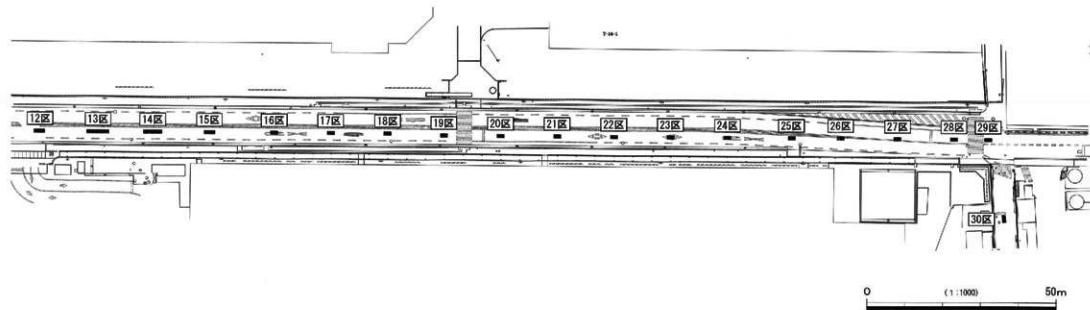
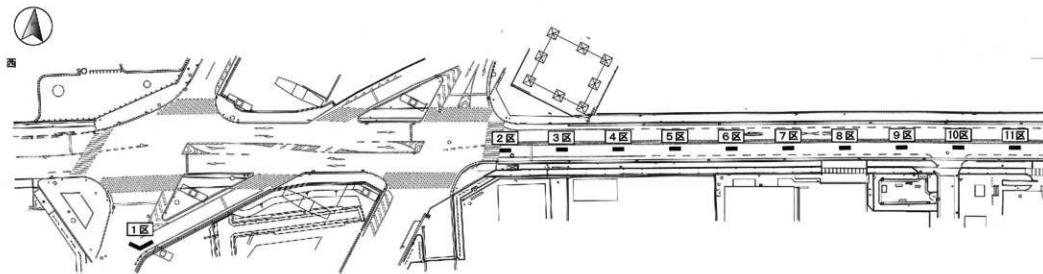
## 第3章 調査成果

### 第1節 基本層序

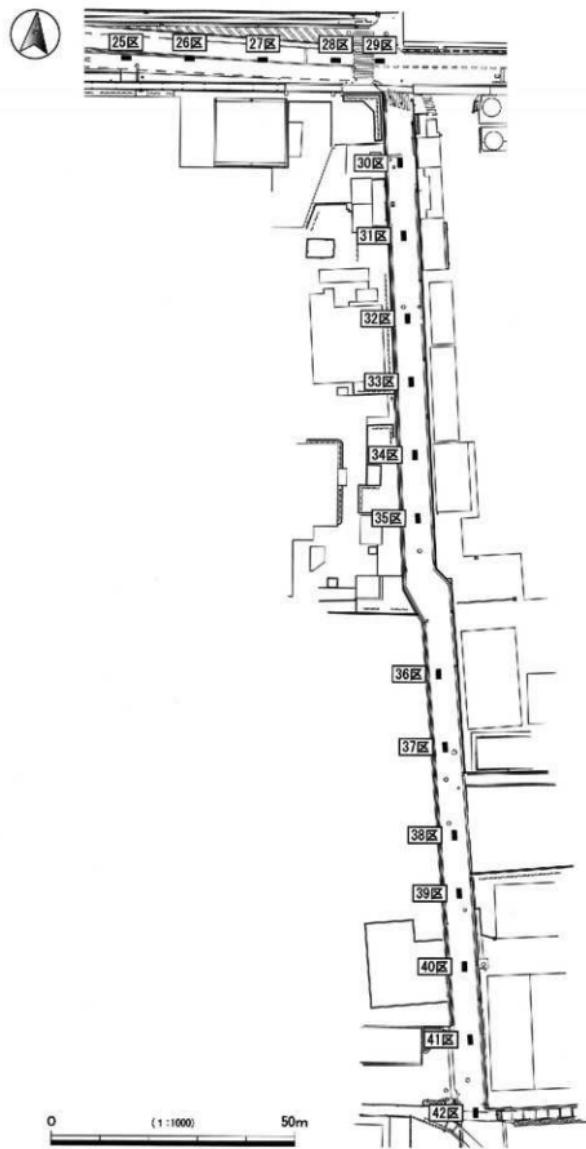
現地表(7.0~7.6m)下1.0m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(第0層)。以下現地表下1.6~2.5m前後までの0.6~1.5m間において7層の基本層序を確認した。第1層は暗灰色極粗粒砂~2mm大細礫混粘土質シルト~シルト。グライ化の顯著な旧水田耕作土である。37~41区でのみ確認できた。それ以外の調査区は、現代の擾乱により削平を受けた場合が多い。第2層はオリーブ灰色~灰黄色粘土質シルト。攪拌の顯著な作土層で、数層に細分できた。グライ化の進行した攪拌層と、酸化の目立つ攪拌層が認められ、前者は水田耕作土に、後者は島畑作土に比定される。瓦器や瓦質土器、近世瓦の細片が混在することから、概ね中世以降に帰属時期を求めることが可能である。第3層は灰色細粒砂~粗粒砂。7~9・11~13・17~29・35~37区と広範囲で確認したラミナ構造の発達した河川堆積物である。第4層は暗灰黄色粗粒砂~極粗粒砂混粘土質シルト~シルト。1・7~16区で確認した土壤化層である。遺物は混在しないが、地層の前後関係から、概ね古代~中世に帰属時期を求めることが可能と考える。1区では、本層上面において柱穴(S P 2)を検出した。第5層は黒褐色シルト質粘土。1・13・14区で確認した、古墳時代初頭~前期の土壤化層である。この内1区の土壤化層は、古墳時代初頭(庄内式期)の遺物が多く混在することから、また13区の土壤化層は、古墳時代前期(布留式期)の遺物を含むことから、それぞれ当該期の遺構内埋土と推測される。第6層は灰黄色粘土質シルト~シルト。1区で確認した河川堆積物である。帰属時期は、概ね古墳時代初頭に比定される。第7層は灰色シルト質粘土。湿地帯のような閉塞した環境下で形成された、粘性の強い泥状の堆積物である。13・14区で確認した。帰属時期は、第6層同様、古墳時代初頭に比定される。



第2図 基本層序断面図 (S = 1/40)

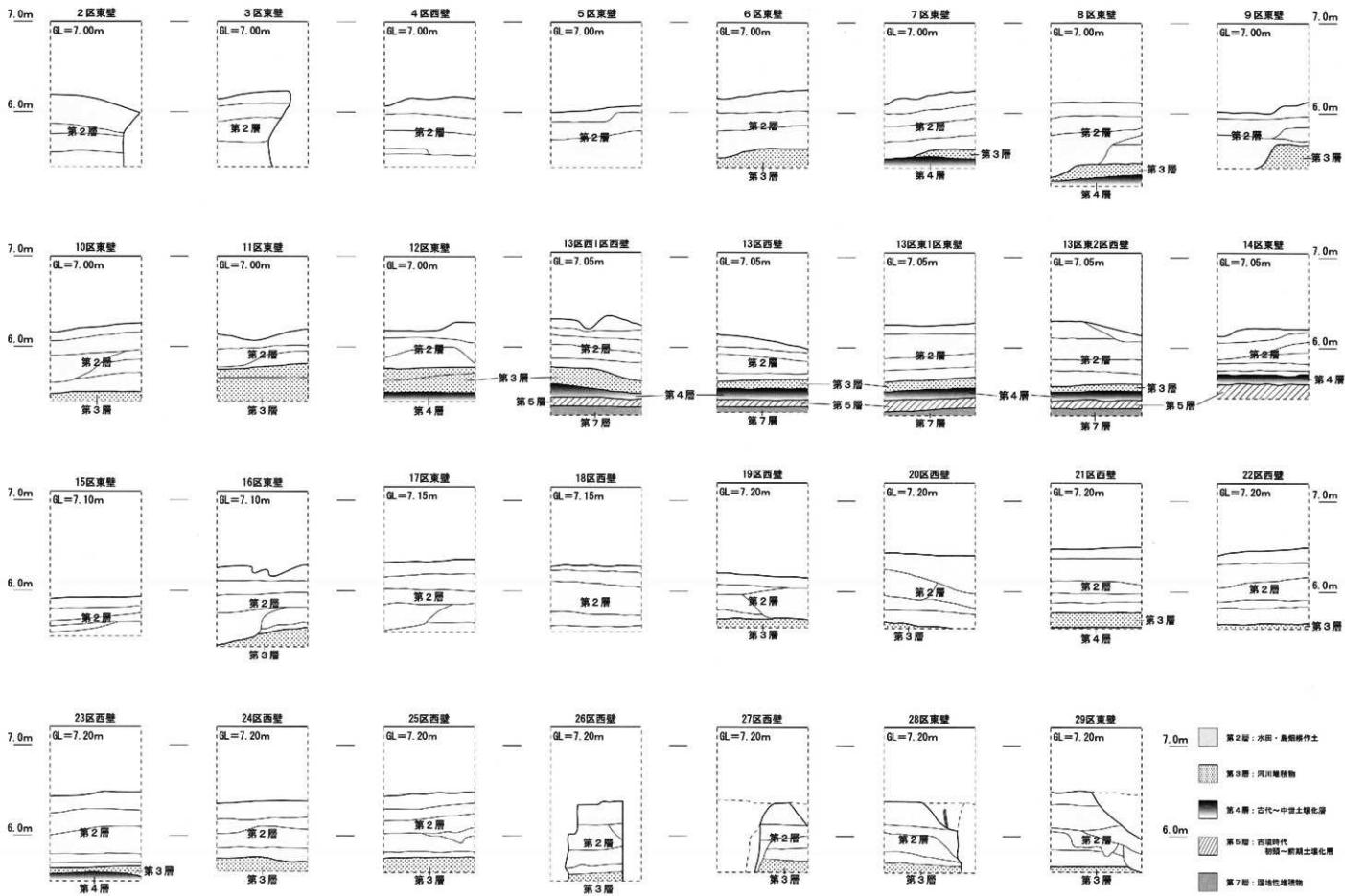


第3図 1~30区位置図  
- 5・6 -

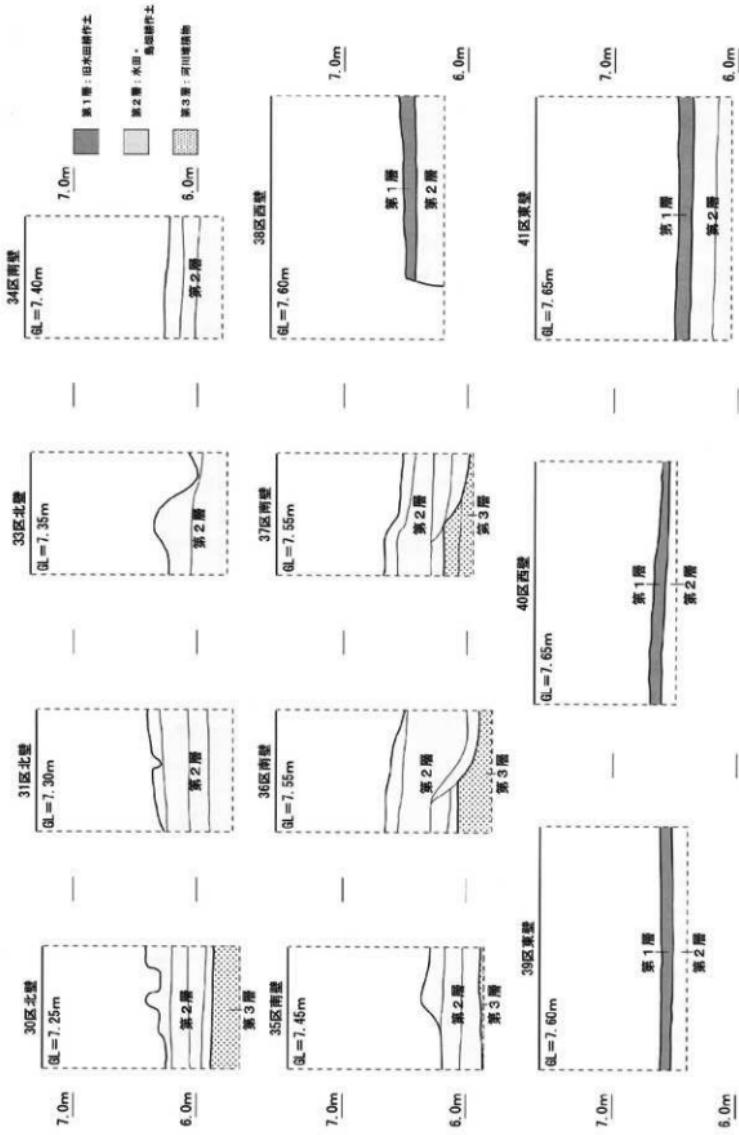


第4図 25~42区位置図





第5図 2～29区断面図 (S = 1/40)



第6図 30~42区断面図 (S= 1 / 40 ※ 32・42区は複数のため断面図は斜めした)

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 検出遺構

#### 島畠1

1区第1層内検出の南北に主軸をもつ島畠である。幅は約3.15mを測る。断面観察の結果、対応する水田面との比高差は0.1mを有していたが、本島畠やこの水田耕作土の上位には新しい時期の水田耕作土が存在することから削平を受けたことが予測され、本来の比高差を失っている可能性が高い。

#### S D 1・2

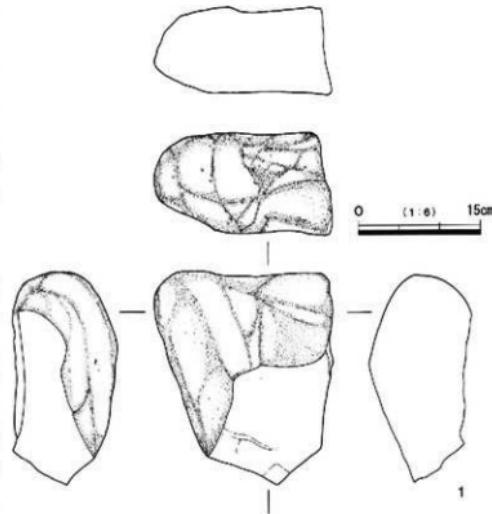
1区において、第1層を除去した段階で検出した溝で、島畠1と同様南北方向に伸びる。北壁断面で確認した S D 1（第4図参照）は、幅0.3m、深さ0.1m、断面形状は楕形を呈する。S D 2は幅0.5m以上、深さ0.2m、断面形状は椀形を成す。いずれも埋土は灰色～灰オリーブ色粘土質シルトのブロック土が充填されていた。水田耕作に伴う鋤溝の可能性が高い。

#### S P 1・2

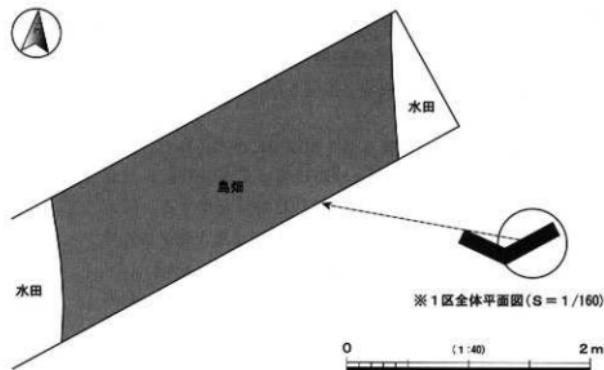
1区検出の柱穴である。この内平面的に検出したのは S P 2である。S P 2は、東側を S D 2に切られていることから全容は不明。概ね、南北に主軸を有する正方形に近い隅丸方形であったと推測される。検出規模は東西長、南北長ともに0.6m以上を測る。深さは0.25mで、断面形状は楕形を呈する。北西角には柱抜き取り穴が存在する。埋土は灰黄褐色粘土質シルト～シルト（3～5cm大ブロック）である。本遺構からは石製品が1点（1）出土した。1は、長さ25cm以上、幅21.5cm、厚さ12.5cm以上の規模を有し、研磨により上面には平坦面を、側面には曲面を形成するものである。欠けている部分が多く、全容は不明であるが、概ね平面が方形を呈し、扁平な断面であったと推測される。柱を支えた礎盤の可能性が高い。なお両遺構の上位には作土層である第1層が堆積しているため、本来の遺構基盤面は削平を受けた可能性が高いが、第4層を遺構基盤層とみなしてよい。

#### S K 1

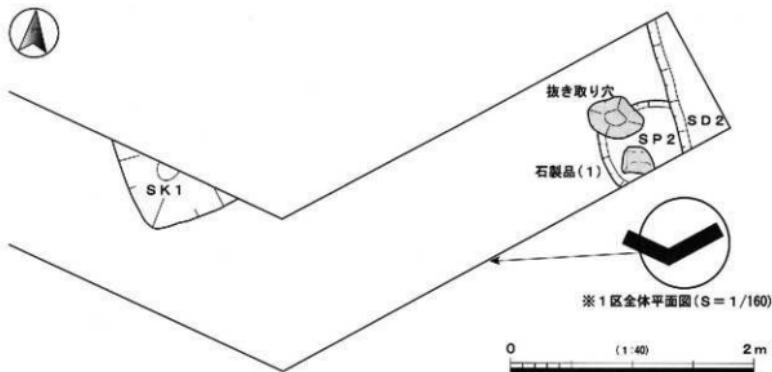
1区検出の土坑である。北側が調査区外に広がるため全容は不明である。方形を呈していた可能性を考えておきたい。検出規模は東西長、南北長ともに0.8m以上である。深さは0.6mを測り、断面形状は逆台形に近い。埋土は3層から成る。上から①：灰色粘土質シルト～細粒砂、②：暗茶褐色粘土質シルトブロック



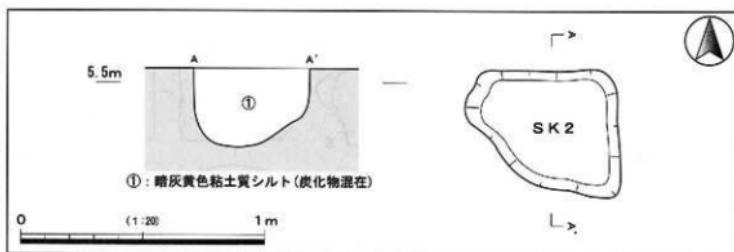
第7図 S P 2 内出土石製品



第8図 1区第1層内検出遺構平面図



第9図 1区第1層除去検出遺構平面図

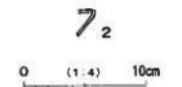


第10図 14区第5層内検出遺構平・断面図

(3~5cm大)、③:灰色粘土質シルトラミナである。この内③層は土坑の機能時に堆積した泥状の堆積物である。一方②層は、廃絶時に人為的に埋めたブロック土である。①層は、廃絶後に残った小さな窪みに堆積した水成層と推測される。この内②層からは土師器細片が出土した。

## S K 2

14区検出の土坑である。第5層を掘削中に検出された。東西に主軸を持つ不定形な土坑で、検出規模は東西長0.6m、南北長0.5m、深さは0.3mを測る。断面形状は楕円形を呈する。埋土は炭化物が混在する暗灰黄色粘土質シルトの単層が充填されていた。本土坑からは、古式土師器甕の細片が1点(2)出土した。2は、口縁部が直線的~若干内湾しながら上外方に伸び、端部は内側に丸く肥厚する個体で、横ナデ調整を行う。古墳時代前期(布留式期古相)に帰属する個体と推測される。



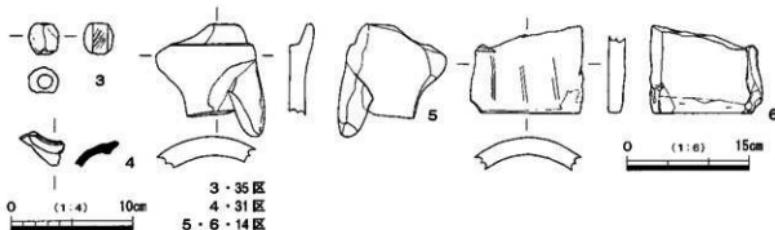
第11図 SK 2 内出土遺物

## 地層内出土遺物

### 第2層内出土遺物

14・31・35区において、若干の遺物の出土を見た。本層は中世以降の水田や畑に伴う耕作土であることから、いずれの遺物も攪拌により下層から巻き上げられたものである。古式土師器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・瓦などの細片が出土したが、この内図化できたのは3~6である。

3は球形を呈する土錘(径2.4cm)である。中央には径1.2cmの円孔を穿っている。4は中世須恵器片口鉢の注口細片である。注口端部は上下に若干肥厚し、内傾する端面を形成する。12世紀中葉~13世紀初頭の所産と推測される。5・6は、同一個体の可能性が高い、胴部径約20cmを測る瓦質の印籠式土管である。水平に伸びる胴尻には、角度を鈍角に転じて玉縁が形成される。調整は、外面がナデを施す。内面は、胴端部と玉縁端部には横位ケズリが、玉縁部にはナデが行われる。これ以外の部分には、布目や莫蘿のような圧痕を確認した。これは、土管を形成する際に用いた『型』に被せて袋の痕跡と考えられる。近世以降の所産と推測される。

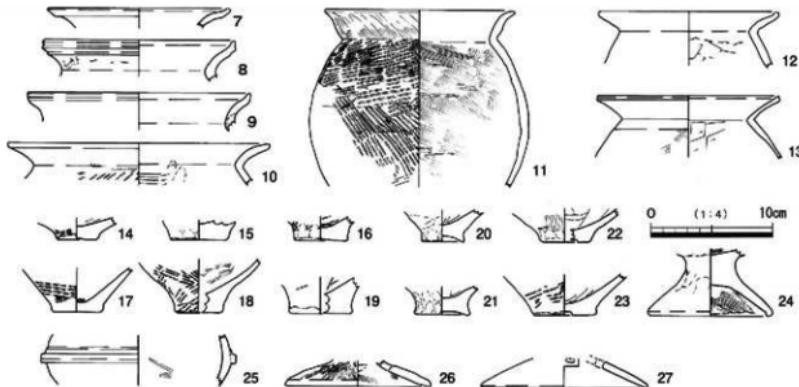


第12図 第2層内出土遺物 (3・4: S = 1/4 5・6: S = 1/6)

### 1区第5層内出土遺物

本層からは古式土師器が多数出土した。この内図化できたのは、7~27である。7は壺の口縁部端部~口縁部。口縁部は大きく外反し、端部付近において若干変化し、受け口を形成する。調整はナデである。8~13は壺。この内8・9は、口縁部が大きく外反し、端部を上方に拡張する個体である。ほぼ直立する端面には、横ナデを起因とする凹線文調の凹凸が認められる。10・11は、大きく外反する口縁部と丸く終息する端部を有する個体である。この内、体部下位まで復元できた11は、体部最大径がほぼ中位に位置するもので、外面にはタタキが施される。タタキの角度の違いから、少なくとも2回に分割して成形している。内面は左斜位ハケナデ。口縁部外面は左斜位ハケナデ、内面は横ナデを施す。12・13は外反する口縁部と上方に小さく拡張を行う端部を有する個体である。調整は両者ともに摩滅のため不明瞭であるが、肩部内面には、板ナデ(12)やケズリ(13)を確認した。この内後者については、ケズリが頭部直下まで行われ、これにより頸部内面が鋭角を成している。14~24は壺または甕、あるいは鉢の底部である。この内14~19は、底部が突出し、底面が平底あるいは小さく上げ底を呈する個体である。概ね外面調整はタタキを施す。内面は板ナデ(14・16・19)やハケナデ(17・18)が行われる。20・21は上げ底を呈する個体。外面には指頭成形痕が、内面には板状工具痕が見える。22・23はドーナツ底を呈する個体である。外面にはタタキが、内面には板状工具痕が認められる。24は脚部を有する個体である。脚部は内湾気味に下外方に開き、端部は内側に肥厚している。外面は指頭成形後ナデを、内面は左斜位ハケナデを施す。25は手焼り形土器の体部である。扁平な体部の最大径付近には、断面長方形~台形を呈した凸帯を貼り付けている。調整はナデ。26・27は小型器台の脚部~脚端部。この内26は、外面において縦位ミガキが密に、内面にはハケナデが施される。脚部上位には円形透孔が穿孔(26:3方向 27:4方向)される。

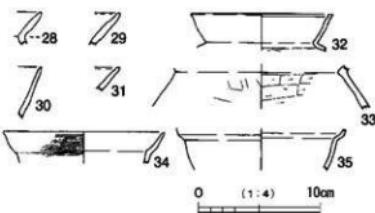
これらの土器群の帰属時期については、13のような庄内式甕が出土していることから、概ね古墳時代初頭に求めることが可能である。



第13図 1区第5層内出土遺物

### 13区第5層内出土遺物

本層からは古式土師器が多数出土した。この内内圓化できたのは、28~35である。この内28~33は壺、28~30は、口縁部が上外方に直線的に伸び、端部が丸く終息する個体である。調整は横ナデを施す。31・32は直線的~若干内湾しながら伸びる口縁部と、内厚する端部を形成する個体である。33は頸部~肩部の細片。外面はハケナデを、内面は横位ケズリ(左→右)を、それぞれ施した後、頸部付近において横ナデを行う。その結果、頸部内面の屈曲はやや鈍くなっている。34・35は有段口縁鉢。34は口縁端部~頸部である。一次口縁と二次口縁の境界に鈍い変化点を形成する個体で、外面には横位ミガキが密に施される。35は34に比して、一次口縁から二次口縁へと明瞭に屈曲する。調整は摩滅のため不明瞭。これらの遺物は、概ね古墳時代前期(布留式期古相)に帰属する。



第14図 13区第5層内出土遺物

## 第4章まとめ

今回の調査では、1区において古墳時代初頭~古代に比定される遺構を検出したほか、13区でも古墳時代前期に比定の遺構内埋土の可能性が高い地層を確認することができた。これらの成果は、両区周辺に当該期の遺構が展開する可能性を示唆しているものと考えられる。今後、周辺で調査が行われる際には注意が必要である。

### 古墳時代初頭

1区で検出した第5層が特筆される。ここでは、第5層が概ね3層に細分できた。この内①層は東部にのみ認められる地層で、最終段階で堆積したものである。②・③層はともに西に向かうにつれて層厚を減していく。この内下位に堆積する③層からは古墳時代初頭(庄内式期古段階)の古式土師器が多く出土した。本調査区の東では、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる久宝寺南その2調査が行われているが、その際にH区で検出されたS D70の西肩付近に対応する可能性が高い。1区周辺では、この時期の遺構の検出に注意されたい。

### 古墳時代前期

13区で検出した第5層がこの時期に相当する。当区において第5層は、黒褐色シルト質粘土~粘土質シルトの単層で、古墳時代前期(布留式期)の古式土師器細片や炭化物が混在していた。本土壤化層は、調査区を拡張した結果、東西幅が10.3m前後であることが判明した。したがって、遺構内埋土の可能性が高くなった。

また14区検出のSK2も当該期の可能性が高く、周辺においてこの時期の遺構が展開している可能性が高い。

### 古代

1区で検出したSP1・2がこの時期に帰属する可能性が高い。久宝寺南その2調査のH区で

は、8～9世紀の掘立柱建物を多数検出した。今回検出した柱穴もこれらに関連するものであろう。したがって、当該期、1区周辺では掘立柱建物により構成された居住域が広がっていたことが明らかになった。

### 中世以降

作土層である第2層と、これに帰属する可能性の高いSD1・2がこの時期に相当する。今回の調査地で普遍的に確認されていることから、当該期、付近一帯は生産域として利用されていたことが明らかになった。

### 参考文献

- ・西村 歩・南條直子 2003『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V』(財)大阪府文化財センター
- ・森屋英佐了・亀井 聰・奥村茂輝 2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI』(財)大阪府文化財センター
- ・赤木克視・一瀬和夫他 1987『久宝寺南(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・坪田真一 1993「10. 久宝寺遺跡第14次調査(KH92-14)」「平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2000「3. 久宝寺遺跡第32次調査(KH99-32)」「平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会



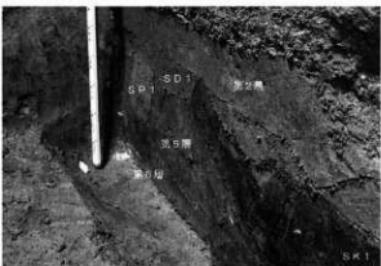
2~29区周辺状況(東から)



30~42区調査地周辺状況(北から)



1区SK 1(東から)



1区北壁(一部SK 1の断面を含む: 南東から)



1区SP 2・柱抜き取り穴検出状況(北西から)



1区SP 2・柱抜き取り穴完掘状況(北西から)



14区SK 2(西から)

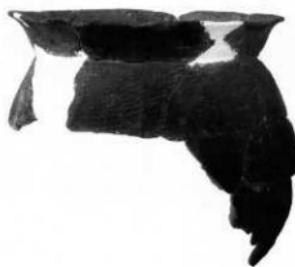


13区西壁地層断面(東から)

圖版  
一  
1区出土遺物



1



11



24



8



17



21



23

S P 2 (1)、第5層(8・11・17・21・23・24)

## 報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく 107
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告 107
副書名	久宝寺遺跡第71次調査 大阪府工業用水道改良事業配水管布設工事①(八尾中央分岐)に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	107
編集者名	樋口 真
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2007年5月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
久宝寺遺跡 (第71次調査)	大阪府八尾市神武町他	27212	23	35度 34分 42秒	135度 36分 47秒	20061025 ～ 20070531	120	大阪府工業 用水道改良 事業配水管 布設工事① (八尾中 央分岐)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第71次調査)	集落	縄文時代晚期 ～近世	古墳時代初期 - 遺物包含層、 古墳時代前期 - 土坑 - 遺物包含層 古代 - 土坑・柱穴 中世以降 - 烟突・溝・水田耕作土	古式土器・土 器・須恵器・ 瓦器・瓦質土器・ 陶磁器・瓦・土 製品・石製品	調査地西～北部 では、古墳時代 初期～前闇の居住域の存在を示 唆する遺物包含層を確認。また 西部では、古代の獨立柱遺物群 が展開する可能性が高くなった。

(財)八尾市文化財調査研究会報告107

## 久宝寺遺跡

第71次調査

大阪府工業用水道改良事業配水管布設工事④00(八尾中央線分岐)

に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行 平成19年5月

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2

TEL・FAX (072)994-4700

印刷 株式会社 近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260kg>  
本文 ニューエイジ <70kg>  
図版 マットアート <135kg>

